

常態においても、含塩材が、他の材料に比較して5～6%高い含水率を示していることがわかった。

3. 薬剤処理木材の材質経年変化について
一般建築用土台角として使用される、ベイツガ、スギ、ヒノキの3樹種について、CCA加圧注入処理材の野外に設置した供試材について、CCAの防腐、防蟻効果と材質の変化を圧縮強度について試験したものである。

試験は、本県下10試験地に、供試材寸法40×40×50cmのものを地上部10cmを残し地中へ打ち込んだものを、毎年各試験地から樹種それぞれ4～6本、無作為抽出した試験材について、地上部、地際部、地中部の3部位について、圧縮試験片を採取し、それぞれの強度変化を標準木と比較評価した。

試験開始後1年間経過時の圧縮強度についての結果を得たのであるが、一年経過時においては、いずれの樹種も、標準木と大差ない値を示しており、環境条件の影響が認められない。2年以降については、試験継続中である。薬剤の防腐、防蟻効力についても良好な結果を得た。

1. 県産材の建材への利用化研究

池田 次男

間伐材の開発利用対策の一環として、間伐材の特性を活かし、製品・性能・施工の分野で、活用の道を開拓し、これら小径木材の高度利用による、建築材への試作によって、業界への普及効果を図る。

供試材 樹種スギ材の間伐材

規格寸法 長さ3m、厚さ15mm、幅65mm

～90mm

構法 下見板張り、筋目下見板張り

施工 杉材独得の木目、節等をそのまま活用し、素朴な感じを表現させる。

建築材は市販の新建材が、大半を占有しているが、間伐材の活用により、住建材への開発利用で、林業振興上からも、その対応策として、今後期待できると思われる。

業界でも、間伐材の高度化利用の気運が高まり、県内でも新設工場が見受けられる。今後も尚研究の必要があり、更に検討を加えながら、継続し製品の高度化を図りたい。

1. 木製家具の試作研究

菊池 元

台檜材、ネム材の2種類の材料を利用したサイドボードの試作研究をおこなったものであって、前者は、台檜材を0.5%にスライスしたものを、ベニヤ板に張り、フラッシュ加工をほどこしたもので、練芯材には、ラワン材を使用した。後者は、ネム材無垢板を利用しての製品であったが、無垢板利用のために「そり」を生じた。組立加工としては、柄穴加工構造として、抽斗前板、戸羽目板は、前者は台檜、後者はネム無垢板を利用したものである。

塗装仕上としては、前者、後者ともに、ポリウレタン樹脂加工仕上げとした。

「住いと暮しの工芸展」に出品し、一般の意見等を集約しても好評価を得たものと考へる。

1. イタジイ材の乾燥試験

遠矢良太郎

イタジイは蓄積量において、本県の代表